

『徳川家康・秀忠の甲冑と刀剣』 正誤表

本書に以下の誤った記述や不適切な表現がありました。お詫びいたしますとともに、訂正いたします。

該当箇所	甲冑・刀剣の名称 表題	誤	正
口絵 6頁、本文 15頁 左から 3行目	白檀塗南蛮胴具足 月輪前立南蛮兜付	(個人蔵・徳川美術館寄託)	(個人蔵)
本文 17頁 左から 7行目	白檀塗南蛮胴具足 月輪前立南蛮兜付	寄託先が豊田市郷土資料館から 徳川美術館に変わってからは、展 示では排除されている。	上記の全文を削除。事実関係が確 認できず、また開示すべき情報で ないため。
本文 92頁 左から 4行目	太刀 無銘 伝三池太光世 (ツハヤノツルキ)	今川家の一族、御宿越前守政友 結城秀康に一万石で召し抱えられ	今川家の家臣、御宿越前守政友 結城秀康に召し抱えられ
本文 92頁 左から 3行目	太刀 無銘 伝三池太光世 (ツハヤノツルキ)	結城秀康に一万石で召し抱えられ	結城秀康に召し抱えられ
本文 112頁 5行目	刀号「分部志津」 無銘 兼氏	(個人蔵・徳川美術館寄託)	(個人蔵)
本文 116頁 3行目	太刀号「兵庫守家」 銘「備前国長船住守家」	大坂落城後、研ぎ直しをせずその ままの姿で伝えられたもの。	織田信長の家臣、丸毛兵庫頭長照 の所持による号。
本文 120頁 左から 4行目	短刀号「包丁藤四郎」 銘「吉光」	[重文]	[重美]
本文 120頁 左から 1行目	銘「吉光」	足利家に伝来	俗説に足利將軍家伝来とあるが文 献では確認できない。
本文 125頁 3行目	太刀 大左文字	豊臣秀吉―豊臣秀次―豊臣秀頼 と伝わったもの。	徳川家康から豊臣秀頼に贈られ、 大坂の陣の後徳川家に戻ったもの。
本文 126頁 左から 2行目	刀号「鳥居正宗」 銘「正宗」	鳥居元忠(中略)かその一族の者 が持っていて、家康に献上された 正宗の刀ということである。	銘の上に鳥居の形が彫られている ことによる号。ただし磨上げであ り、銘も後代に切られたものと考え えられる。

該当箇所	甲冑・刀剣の名称 表題	誤	正
本文127頁 5行目	刀号「吉見左文字」 銘「左文字吉見正頼研上之 永禄九年八月吉日」	その関係から毛利輝元の所有となつて家康に献上されている。	その後、徳川家に伝わつたがその経緯はよくわからない。
本文127頁 左から3行目	刀銘「村正」	「潰物になる筈。疵物にて用に相立ちがたき部類に入置く事」	「潰物になる筈」疵物にて御用に相立ちがたく候」
本文130頁 3行目	脇指号「鯨尾藤四郎」	(前略)―土方勝久(後略)と伝来した。	―土方勝久(後略)を削除
本文131頁 3行目	銘「吉光」	三家老を、土方勝久に命じてこの脇指を与えて斬らせた。	家老の岡田重孝を本刀で刺殺したともいわれる
本文131頁 左から7行目	短刀号「海老名小鍛冶」 銘「宗近」	三好長慶―足利義輝―織田信長―織田秀信(後略)と伝来した。	足利將軍家―豊臣秀吉―徳川家康と伝来した。
本文133頁 左から1行目	短刀号「大坂長銘正宗」 銘「相州住正宗 嘉暦三年八月 日」	細川幽斎―豊臣秀吉―豊臣秀頼と伝わった。	『享保名物帳』には「(細川)幽斎老所持秀吉公へ上る」とある。
本文135頁 左から3行目	短刀 無銘 則重	子の至鎮と徳川家康養女の縁組の時に献上された。	のち徳川家康に献上された。
本文153頁 左から4行目	太刀 銘「久国(花押)」	〔国宝〕の表記なし (個人蔵)	〔国宝〕 (文化庁蔵)
本文217頁 5行目	あとがき	刀剣類はあまりにも多く、大きな樽に油を湛えて大量の刀を吊るして保管している。	刀剣類は非常に多いが、嚴重に管理されており、これまで研ぎに出されたものはない。